

光り輝く者：『リグ・ヴェーダ』からの詩節 冬至をたたえて

光り輝く者

『リグ・ヴェーダ』からの詩節

महि ज्योतिर्बिभ्रतं त्वा विचक्षण भास्वन्तं चक्षुषेचक्षुषे मयः ।
आरोहन्तं बृहतः पाजसस्परि वयं जीवाः प्रति पश्येम सूर्य ॥

*mahi jyotirbibhrataṁ tvā vicakṣaṇa bhāsvantaṁ cakṣuṣe-cakṣuṣe mayah /
ārohantaṁ br̥hataḥ pājasaspari vayaṁ jīvāḥ prati paśyema sūrya ||*

おお、見晴るかす太陽よ、光の運び手よ、
一つ一つのありとあらゆる瞳にとっての喜びよ、
高く昇るにつれてあふれるように差し込む
あなたの壮麗な輝きを見るために私たちが生きますように！

यस्य ते विश्वा भुवनानि केतुना प्र चरेते नि च विशन्ते अक्तुभिः ।
अनागास्त्वेन हरिकेश सूर्याह्नाह्ना नो वस्यसावस्यसोदिहि ॥

*yasya te viśvā bhuvanāni ketunā pra cerate ni ca viśante aktubhiḥ /
anāgāstvena harikeśa sūryāhnāhnā no vasyasā-vasyasodihi ||*

あなたが輝くと、あらゆる生き物が現れます。
あなたが姿を消すと、皆、休息します。
私たちの純真さを認め、おお、黄金の髪の太陽よ、
姿を現してください。毎日を前の日よりも良い日にしてください。

शं नो भव चक्षसा शं नो अह्ना शं भानुना शं हिमा शं घृणेन ।
यथा शमध्वञ्छमसदुरोणे तत्सूर्य द्रविणं धेहि चित्रम् ॥

*śaṁ no bhava cakṣasā śaṁ no ahnā śaṁ bhānunā śaṁ himā śaṁ ghṛṇena /
yathā śamadhvañchamasadduroṇe tatsūrya draviṇaṁ dhehi citram //*

あなたのまなざし、あなたの明るさと輝きで私たちを祝福してください。

寒さの中でも暑さの中でも私たちを祝福してください。おお、太陽よ、

家でも、旅路においても、私たちに祝福を与え、

あなたの驚くべき宝を授けてください。

© SYDA Foundation®. 著作権所有。

Rig Veda 10.37.8-10; Raimundo Panikkar, *The Vedic Experience: Mantramanjari* (Los Angeles: U. of California Press, 1977), pp. 294-95.

エリック・ベイリンによる紹介

水平線から昇る太陽を見た朝のことを思い出してください。最初の光線からのかすかな光が徐々に全方向に広がり、世界が光の海で満たされていくのを見た時、あなたはどのように感じましたか。黄金の波が目の前のすべてのもの——雲、木々、家々の屋根——を洗い、金色に染め上げていきます。私たちは、この光の壮大な現れが私たちの惑星の至る所で毎日繰り返しられていると知っているのです、インドの最も初期の教典である『リグ・ヴェーダ』の著者たちが、なぜ太陽をたたえ、敬ったのか、十分に理解することができます。

ヴェーダの時代から、太陽はスーリヤ神として崇拝されてきました。あらゆる方法で、太陽は私たちを支え、養っています。新しい朝が来るたびに、太陽は世界を新たに展開します。命を与えるその光線は私たちを温め、私たちの食物となる植物を育てます。私たちの生活においてすべてを包み込んでいるその存在は、来ては去る確実なリズム、その徹底した寛容さと揺るぎない輝きを通して、私たちを励まします。

私たちの惑星が太陽の周りを回る一年の旅の間、特に熟考と祝祭を招く特定の瞬間が 2 回——6 月と 12 月の至点——あります。地球の傾きにより、12 月に南極点が太陽に最も近づく瞬間があり、それが北半球では冬の、そして南半球では夏の到来の合図です。反対に、6 月に北極点が最も太陽に近づくと、夏と冬の到来は各半球で逆に体験されます。

北半球で、冬至は 12 月 21 日です。その日までは、昼は短くなり続けます。そして、地球と太陽が至点にぴたりと並ぶ瞬間、逆転が起こります。昼が再び長くなり始め——まさに、祝祭の理由となるのです。

ラテン語を起源とする solstice (至点) という言葉は、遠い昔からこの瞬間がどのように受け止められてきたかについて、私たちに洞察を与えています。ラテン語で、sol は「太陽」を意味し、語根の stit は「動かない」を意味し、これらの瞬間に太陽は静止しているように見えることを示唆しています。

それはあたかも地球が自らの太陽と調和して呼吸しているかのようであり、そして至点のこの休止は、吸う息と吐く息の間の神聖な休止——私たちのマインドが瞑想の中に落ち着き、至高なる自己の光の体験への入り口を見つける瞬間——とよく似ています。

『リグ・ヴェーダ』からのこれらの詩節をぜひ熟考してみてください。空の壮麗な輝き、すなわち地球の太陽を敬う方法として、そしてまた、あなた自身の大いなる自己である輝き、すなわち呼吸の瞑想的な休止の中で明らかにされる内なる「太陽」を敬う方法として。いずれも、私たちが常に育み励ましている、偉大な持続的な光を体現しています。

